

リンゴ栽培地域における土地利用の変遷

－黒石市における土地利用－

山 田 良 一

(I)はじめに

青森県の産業構造は、第一次産業とくに農業の占める割合が高い。農業生産性の高いのはリンゴ生産によるものであり、リンゴの青森県経済に占める位置はきわめて重要である。すくなくとも青森県においては、リンゴ栽培が土地利用としては最高の形態であるといえる。これが中弘南黒の地域に集中している。そこで筆者は、黒石市を例としてとりあげ、農業的な土地利用がどのようになされているか考察してみたいと思う。

(II)黒石市の概観

黒石市は、青森県のほぼ中央で津軽平野の東両端に位置し、総面積216Km²である。本地域の農用地はほとんど浅瀬石川流域に広がる平坦地と、それに続く丘陵地は樹園地として利用されている。そのほかは、ほとんど山林によってしめられており、地域の50%が農業的に利用されているにすぎない。気候は三方が山地にかこまれているため盆地型を示し比較的温和である。土壌は浅瀬石川流域の平坦部は沖積層からなり表土20cmは埴壤土であり、丘陵地は火山灰土からなり壤土である。このような土壌であるため、水田においては一部排水不良がみられるが、概して肥沃である。樹園地、畑地は酸性土壌を呈している。

(III)各地区の現況について

黒石市における、昭和35年から昭和45年にかけての耕地面積の推移を示したものが表1である。

表1 黒石市における耕地面積の推移

	田	畑	樹園地	計	
昭和35年	214290	54504	86275	355069	〔単位：a〕
40	210192	43943	92189	346324	
45	218064	35123	107628	360815	

(黒石市の農業より)

これを利用別にみると、田はどの年も全耕地面積の60%ほどを占めていてあまり変化はみられない。畑は、昭和35年には全耕地面積の15%であったが、年々減少傾向を示し、昭和45年には10%を占めるにすぎない。一方、樹園地は、昭和35年には全耕地面積の25%、昭和45年には30%へと年々増加の傾向にある。樹園地における、リンゴの品種も最近では

高級品種（つ・ふじ・王鈴・恵・スターキング・デリシヤス・ゴールデン）をかぶり栽培しているし、労働力不足を補うために無袋栽培も行なわれている。つぎに、黒石市における農家数は減少傾向をたどっているが、急激な社会情勢の変化にもかかわらず、そのテンポはきわめて緩慢であるといえる。また、専業農家が年々減少傾向にある一方、兼業農家なかでも第二種兼業農家の増加が著しい。

(1)中郷地区

当地区は、地域の北西部に位置し、農用地のほとんどが田として利用され、畑、樹園地の占める割合が非常に少ない。現在の戸当り経営規模は0.9 ha であるが、今後とも外延的拡大のできない地区であり、さらに野際、野添、目内沢などは市街化区域に隣接し県道沿線の宅地化・工場誘致等により農用地面積は減少の傾向にあるため、小規模農家の離農を促すとともに、中核農家による協業組織を作り、委託農地により保有面積を拡大する方向にある。水田減反後の転作面積は1324アールで単純休耕の占める割合が高い。いわゆる純粹の水田地帯であるため、リンゴへの転作はみられず、スイカ・大豆を中心にニンニク・白菜・ライ麦などがあげられる。

(2)六郷地区

当地区は地域の北東部に位置し、平野部に属する農用地約500 ha は田として利用され、水利系統は輻輳し、傾斜度 $\frac{1}{300} \sim \frac{1}{200}$ である。また、当地区の県道をはさんだ東側に位置し山にひらける農用地は樹園地として利用され、傾斜度5～25度である。戸当りの経営規模は約1 ha で田とリンゴの複合経営である。水田減反後の転作面積は2431アールで、品目は、スイカ・リンゴが中心でこの両者でもって全体の81%を占めている。そのほかは、メロン・ぶどう等がある。

(3)山形地区

(a)山形地区

当地区は、地域の東部に位置し、中野川の支流田山堰を水系とした約230 ha の農用地は田として利用され、傾斜度は $\frac{1}{300} \sim \frac{1}{200}$ である。田に続く台地は樹園地として利用され、傾斜度は5～25度であり、農道は傾斜度が強く未整備の状態である。経営形態は田とリンゴの複合経営である。

(b)南中野地区

当地区は、地域の南東部に位置し、中野川水系に属する農用地約50 ha は田として利用され、傾斜度は $\frac{1}{100}$ である。田に隣接する山間合地にひらける農用地約100 ha は樹園地として利用され、傾斜度は10～25度である。南中野部落より、国有林を通過し約10kmの地点、八甲田山麓にひらけた開拓地の農用地450 ha、このうち約155 ha は畑として利用され、高冷地野菜団地を形成している。また、その隣接地は傾斜度が10度の平坦地で採

草放牧地として利用されている。経営形態は、一戸当たり0.8haの田とリンゴの複合経営農家と畑作単作経営（普通畑1.5ha）の農家に大別される。

(c)沖浦地区

国道102号線一の渡部落より東側に入る青荷沢にひらけた青荷沢開拓部落に存する農用地約34haは沢水を利用した田約7haと畑27haに利用され、田は最近開田されたものである。畑は傾斜度0～5度で農道も整備されている。開拓地であるため、畑一戸当たり1.5haを有する畑作単作の経営形態である。

山形地区全体における水田減反後の転作面積は6504アールで、黒石市全体の43%という最大の転作面積である。品目はリンゴ・スイカが中心で、そのほか開拓地における高冷地野菜（白菜・レタス）や小豆・クルミなどである。

(4)浅瀬石地区

当地区は地域の南部に位置し、浅瀬石川を取入れ口として猿賀堰、新屋堰水系とする農用地は田として利用されている。田の南東に続く台地は樹園地として利用され、傾斜度5～20度で他の地域に比較して緩やかな形を有している。中川・浅瀬石地域は規模が比較的小さい農家が多いため、季節的出稼ぎ農家が多く、そのために農業就業者が激減し、大規模農家が中核となり協業組合を組織し、小規模農家の作業委託をうけて生産性の向上に努めている。高賀野地域は、労働力が不足し、リンゴの比重が大きい区域のためとくに省力栽培が望まれる。水田減反後の転作面積は242アールと規模は小さい。スイカ・リンゴ・小豆がそれぞれ10%位を占め、野菜の品種も少なく、ほとんどが自家消費である。

(M)まとめ

(1)黒石市においては、田が全耕地面積の60%を占め、畑の減少に伴い樹園地が増加の傾向にある。

(2)田は、西部平坦地のほか浅瀬石川流域に、樹園地は山間丘陵地に広く分布し、両者でもって地域農用地の大部分を占めている。

(3)市街化区域に隣接している地域では、農用地面積は減少の傾向にあるため、委託農地により保有面積を拡大する方向にある。

(4)市街地から4～5kmの地域における土地利用は、田と樹園地が中心となっている。

(5)市街地から遠く離れた16km以上の地域においては、山麓高冷地（標高500～700m）での畑、採草地の利用がみられる。

最後に、本論文を作成するにあたって、御助言、御指導くださいました横山・水野両教官に深く感謝いたします。

< 参 考 文 献 >

- (1)黒石市役所 黒石市の農業 (44年, 45年, 46年版資料)
- (2)黒石市役所 黒石農業振興地域整備計画書 (昭和45年)
- (3)長谷川 典夫 “西部盆地列の農業的土地利用”
日本地誌ゼミナールⅡ(1960年) 大明堂
- (4)横山 弘:今井 六哉 “岩木山南麓開拓地の土地利用”
東北地理 14巻4号(1962年)
- (5)市川 健夫 “善光寺平の土地利用”
日本地誌ゼミナールⅣ(1962年) 大明堂

図1 黒石市の土地利用

